

災害と回復

著者	飯田 卓
図書名	文化人類学. 内堀基光, 奥野克巳編著. (放送大学教材, 1554778-1-1411)
開始ページ	182
終了ページ	193
出版年月日	2014-03-20
URL	http://hdl.handle.net/10502/00008506

14 | 災害と回復

飯田 卓

《目標&ポイント》 災害は、個人的な生命の危険だけを意味するわけではない。災害には、個人の社会的生活中断から始まり、社会全体の機能不全に至る社会的問題という側面もある。このことを踏まえて、本章では、①日常的ルーチンの阻害、②公共サービスの機能の破壊、③コミュニティ機能の破壊、④ローカルな経験知の損失という四つの側面を検討する。最後に、災害がもたらすこうした負の効果を避ける仕組み、あるいは被害を受けても復興するような仕組みについて、文化人類学の立場から考える。

【キーワード】 公共サービス機能、コミュニティ機能、ローカルな経験知、伝統とモダニティ、レジリエンス

1. 災害とは

天災にせよ人災にせよ、災害と聞けば、まず個人の生命の危険を想像しがちである。新聞報道などは「死傷者〇〇人」といった見出しを大きく掲げるから、なおさらだ。辞書を引いてみても、日本語における災害のもっとも一般的な意味は、「異常な自然現象や人為的原因によって、人間の社会生活や人命に受ける被害」（『広辞苑』第六版）である。この定義によれば、被害者が少ない自動車事故のようなものも含まれる。

しかし本章で着目したいのは、とりわけ、被害者が多数にのぼる災害である。また、個人的な生命の危険よりも、個人・集団の社会的生活がこうむる負の効果に着目し、社会的な事件として災害をとらえてみたい。

災害の原因はさまざまである。地震や洪水のような自然災害から、建

築設計ミスや飛行機事故といった人為的災害がある。また、自然災害や疫病への対策が十分でない場合は、自然災害が人為的災害と解釈されることがある。本章では、これらすべてを一括して災害とみなす。

さまざまな災害に共通しているのは、被災者の日常生活を中断し、それにもなつてさまざまな不便をもたらすことである。災害によって、私たちが日常のなかで繰り返す決まりごと（ルーチン）は、ふだんどおりには行えなくなる。ここで言う決まりごととは、癖のようなもので、意識されることもあるし、されないこともある。

たとえば、朝起きる前に寢床で行う動作、家族や同僚への挨拶（挨拶をしないことも、あるいは意識的な決まりごとかもしれない）、食事をするときの箸の持ち方……。個人的な決まりごとがあれば、社会で広く行われる決まりごともある。個人的な決まりごとは、主として反復の多い仕事を効率よくこなすのに役立つ、社会で広く行われるものは、コミュニケーションを円滑にする。

こうした決まりごとの機能を、災害は役に立たないものにしてしまう。家族から離れてただ独り避難生活を送るなかでは、挨拶する相手がいなし、かりにいたとしても、いつもとは違った出会い方をするようになる。また、災害のためにごみ回収車がいつものように来なければ、いつもの曜日にごみ捨て場までごみ袋をもっていても意味がない。災害は、個人個人が社会生活に必要とするルーチンを破壊し、社会生活を不全に陥れると言えよう。

このことは、われわれが社会生活においてどのようなことがらを必要とするのか、あらためて気づかせてくれる。災害という事態をとおして、われわれは、社会生活が成り立つ仕組みを理解できるようになるのである。災害が個人にとつてもつ意味が、文化人類学にとって重要性をもつゆえんである。

2. 公共サービス機能の破壊

災害がもたらす負の効果を、別の側面から見てみよう。前節において、ごみ回収車がいつものように来ないという例を出した。これは、個人がいつも頼っている制度的なサービスが中断することを意味している。そうした効果が、個人のルーチンにまで影響をおよぼすというわけだ。

電気の供給、水の供給、安全に通行できる道路。現代の日本に生きるわれわれは、これらの公共サービス機能を自分たちで維持するのではなく、専門の機関やそこで働く人たちに任せきってしまっている。だから、ひとたび災害が起こると、自分たちだけでは復興できず、政府に対応を求めることになる。2011年の震災にともなって生じた原子力発電所の事故がもっとも良い例だろう。

しかし、ことは原子力発電所だけではない。現代の私たちの生活は、さまざまな専門家からサービスを受ける形で成り立っている。専門家たちを頼ることによって、私たちは、10時間のあいだにアメリカやヨーロッパなどの遠隔地にまで移動することができる。そして、現地でのふるまい方さえ気をつけていれば、太平洋上を飛行するうえでの安全な高度について心配する必要はないのである。こんな具合だから、ひとたび専門家からのサービスが途絶えたとき、その不便ははかりしれない。2011年の東日本大震災では、被害がそれほど大きくなかった首都圏でさえ、公共機関を頼らずに徒歩で帰宅した人たちが多かったことがそれを物語る。

こうした専門家への依存は、私たちの生きる現代の特徴である。社会学者のA・ギデンズは、この特徴を、モダニティ（近現代性）のもつ重要な側面として指摘する。人類史のうえでモダニティに先行する伝統社会では、社会生活をいとむうえで頼りになるのは専門家でなく、さま

ざまな経験を重ねるなかで共同体(コミュニティ)に伝えられてきたローカルな知識である。伝統社会でも、他の人びとがもたない知識をもつ、専門家に近い役割を果たす人びとがいる。しかし彼らのもつ知識は、特定地域でのみ通用するもので、別の地域で吟味されて組み換えられない。したがって、伝統社会における権威は、長い時間をかけて形成されたローカル知識を守護する立場にある。一方モダニティにおける専門家は、場所にかかわらず通用する知識を求め、自分の専門知識と対立するようなローカル知識を批判していく。専門家は、きわめて限られた領分しかもたないが、その領分に関わる知識を吟味するにあたり、ラディカルかつ厳格な態度を示す。この厳格さが、今日の科学技術の発達の基礎となったのだ。

3. コミュニティ機能の破壊

前節では、ギデンズ用語法にしたがってモダニティと伝統社会とを対比させたが、両者は完全に対立するものではない。たいていの社会にはローカルな物知りと専門家の両方がいて、社会に貢献しているものだ。モダニティ傾向が強い社会と、伝統傾向が強い社会のあいだに、無数のバリエーションが存在していると考えたほうがよい。

前節で述べたのは、モダニティ傾向が強い社会で災害が生じたときの問題だった。では、伝統的傾向が強い社会ではどうか。やはり災害と呼ぶべきことがらはある。たとえば、洪水や旱魃などの自然災害がその典型だろう。こうした災害が起きた場合、モダニティ傾向が強い社会では、被災地を外部から支援することで復興を成し遂げようとする。しかし伝統傾向が強い社会では、個人の裁量で困難をきりひらかなければならない。

東アフリカの牧畜社会では、旱魃が深刻になったとき、二つの面に対応を行う。J・ターランス・マケイブの紹介するところでは、家畜群の分割と家族の離散である（ホフマン・オリヴァー＝スミス編 2006）。

（家畜群の分割）村の近くで家畜の餌が十分でなくなると、遠くに餌場を求めなければならないが、手元には乳の出る家畜や現金化する家畜を置いておかななくてはならない。そこで、乳用の家畜および現金化する家畜と、遠くへ放牧させる家畜とを分けるのである。遠くの餌場では、家畜が病気になったり略奪に遭ったりする危険が高まる。しかし雨が降らず旱魃が深刻化すれば、放牧地はますます村から遠ざかり、家畜数を減らすリスクが高まっていく。このため、深刻な旱魃が予想されるときには、売却される家畜の数も増える。じっさいに旱魃が深刻化すると、家畜が市場にあふれて価格が下がるため、家畜は食用に殺されるようになる。いずれにせよ、餓死する家畜を含めて、家畜数は旱魃とともに減少すると考えてよい。

（家族の離散）このプロセスは、餌不足のために家畜の乳量が減り、家族全体の栄養源が減ることから始まる。雨季に身を寄せていた親戚はもちろん、旱魃が長期化すると、長く一緒に暮らした家族も豊かな親戚を頼るようになる。現代では、賃金雇用や救援物資を求めて都市へ移動するという選択肢もある。過酷な乾季をきっかけとして、生活の中心を都市へ移してしまう例も少なくない。

雨量が増えれば、災害の根本原因は解決されるが、暮らしが正常化するわけではない。一定の家畜数が回復しないことには、家族が元どおりに集まれないからである。それどころか、回復の見込みがつかないことすらある。救援物資を頼って都市に出た者たちは、伝統的な生活を拒否したとして、被害の少なかった親戚から家畜を分与してもらえないことがあるという。現代では、餓死のリスクが緩和されたかもしれないが、

災害は今なお社会関係の崩壊をもたらすのである。

災害をきっかけとする身近な社会関係の崩壊は、モダニティ傾向が強い社会でも見られる。2011年の東日本大震災のように、被害が広域におよぶ災害において、その傾向は著しい。注目したいのは、この震災で被害を受けた村落部でも、東アフリカの牧畜社会と同様に、避難生活が長びくあいだに帰郷を断念するケースが多いことである。災害直後に住民の多くが生き残ったとしても、復興への志となりうるような強い精神的支柱がなければ、復興途上の不便をしのいでまで帰還しようとは思わない。

強い精神的支柱となりうることがらは、きわめてローカルなもので、集落外の人びとや行政関係者にはなかなか伝わりにくい。民俗芸能がその一つである。東日本大震災の復興にさいしては、次のような語りによって、文化遺産の重要性があらためて認められるようになった。橋本裕之が聞きとったところでは、「釜石に住んでるから虎舞をやってるんじゃない、虎舞をやってるから釜石に住んでいるんだ。だから虎舞がなくなったら釜石には住んでる理由なんてないんだ」（日高編 2012）。

東アフリカ牧畜社会の場合も三陸沿岸地域の場合も、集落の物的壊滅だけが問題なのではない。ここであげた事例に関していえば、むしろ、集落の離散と分裂が問題だと言えよう。避難生活のあいだに絆が薄れたり、あるいは避難生活をきっかけに対立が表面化したりして、帰還しない者たちが現れる。これが多数にのぼる場合、集落は消滅する。集落が消滅するから社会関係が途絶えるのではなくて、社会関係が途絶えるから集落が消滅するのである。

都市よりも人口規模がはるかに小さい集落では、対面的なコミュニ

ケーションやトランザクション（物品のやりとり）をとおして社会関係が築かれ、集落での生活を支えている。これを集落のコミュニティ機能と呼ぶことにしよう。交通や通信が不便な場所では、コミュニティ機能は、公共サービス機能以上に大きな意味をもつ。いや、都市と呼べるような場所ですら、コミュニティ機能の損失は、しばしば復興の阻害要因となるのである。

4. ローカルな経験知の損失

コミュニティ機能の破壊は、いわば、ローカルな人間と人間の関係が失われてしまうという事態だった。これと同様に、ローカルな自然と人間との関係が失われてしまうケースがある。このタイプの損失の大きさはまだ十分に評価されていないが、一部では問題としてとりあげられつつある。代表的な例は、災害時の対応についての伝承である。東日本大震災で被災した三陸沿岸各地は、それまでにも30～50年ごとに大きな津波に見舞われており、そのときの経験は重要な記憶として伝承されてきた。大きな海鳴りや海底の干出が津波の予兆であることは、行政が防災普及活動を行う以前から、ローカルな自然と人間との関係として伝えられてきた。

おまけに、集落内での伝承は、行政が提供する防災知識よりはるかにきめ細かい。茅葺き建築のある民家では、津波が来たら雨戸を閉めて逃げるよう伝承されていた。東日本大震災のときにこれを守って逃げたところ、大きな屋根が家を抱えこむように潰れたため、家財が流失せず残ったという。家の造りが異なるような場合は、雨戸を閉めることに大きな意味はなく、ときには危険かもしれない。しかし、特定の条件のもとでとるべき防災行動は、対面的な人間関係をとおして、きわめて詳細かつ

具体的に伝えられているのである。

自然と人との関係をめぐる具体的な経験や知識を、ここではローカルな経験知と呼んでおく。これは、特定の場所やできごとに結びついた経験で、いわゆる知識のように本に書かれうるものだけではなく、なまの感覚や身体技法なども含まれる。集落が消滅すれば、ローカルな経験知も消滅する。それによる損失は、集落の人たちだけに関係すると思われがちだが、きめ細かな知識の損失という点では、グローバル社会に生きるわれわれや後世の人たちにとっても大きな意味をもつ可能性がある。

5. 社会の破局

災害がもたらすさまざまな負の効果を概観してきた。この効果が大きくなると、社会は存続できなくなる。破局という事態である。この事態は、伝統的傾向が強い社会にもモダニティ傾向が強い社会にも生じうるが、その様相は異なるようだ。

伝統的傾向が強い社会では、コミュニティ機能の破壊（人と人との関係破綻）およびローカルな経験知の損失（自然と人との関係破綻）により、破局がおとずれる。この社会では、ローカルな関係性が社会の結合力として働くため、その関係性が損なわれると社会が存続できなくなるのである。

このことに関しては、20世紀第二の規模と言われるピナトゥボ火山（フィリピン）の噴火に災いされた、先住民アエタについてのすぐれた民族誌がある。『噴火のこだま』と題するこの本によると、避難生活を余儀なくされたアエタたちは、支援物資に依存しながら暮らすなかでかわめて大きな岐路に立たされた。再定住地で伝統的生活を再開するのか、近代的な物資やサービスにアクセスしやすい町暮らしを選ぶのか。後者

だとすれば、どのように社会参画をはたし、近代的生活に必要な知識やふるまいを身につけるのか。一步間違えば、「平地民社会の最底辺への同化の道を推し進める」ことになりかねないと著者である文化人類学者の清水展は言う。

つまり、個人が災害を生きのびたとしても、社会が十分に回復しない場合、それまでとはまったく異なる生活様式を選ばざるをえなくなる。ローカルな関係性を断たれた社会が崩壊し、まったく異なる関係性のなかに個人が投げ出されるからである。災害を生きのびた個人が延命することは重要だが、身近な社会が一変してしまえば、その後の人生が意義あるものになるとは限らない。こうした状態から復興を果たすためには、救援以上の支援を外部から行う必要がある。

一方、モダニティ傾向が強い社会では、破局がおとずれても社会環境はかなりのていどまで復元できる。とくに公共サービス機能に関しては、国内や海外からの支援で技術的な補修を進めやすい。しかし、原子力発電所事故の被災者は、飛散した放射性物質を避けて長期の避難生活を続けることになった。アエタの人びとのような社会参画面での問題は少なかったにせよ、将来の見通しをつけにくいことには変わりない。

このことに加えて、まれではあるが、災害が広域にわたるため回復の見込みがつかないこともある。モダニティ傾向が強い社会では、出力の大きな科学技術が用いられるため、一般的に災害の規模が大きい。これに内戦などが加わって、外部からの援助が困難になれば、回復の見通しがつかなくなる。

また、物理的な回復を達成したとしても、大規模災害につながりやすい公共サービスの運営が見直されるという形で、社会のあり方が大きく変わることがある。2001年にニューヨークの世界貿易センターに飛行機を激突させたテロリズム行為で、飛行機による出入国の審査が厳しく

なったことはよく知られている。2011年の東日本大震災によって、原子力行政には多かれ少なかれ転換が迫られている。これら技術運用の変更は、破局というには当たらない。しかし、見過ごされていた危険が露呈し、社会のさまざまな面に影響がおよぶことは、社会の変革をともなう大きな事件である。その意味で、破局に準ずるできごとととらえたい。

6. 防災力と回復力

本章の結びとして、災害に強い社会を構想してみよう。それには二つの側面がある。災害の拡大を未然に防ぐ防災の側面と、災害からたち直る回復の側面である。

まず防災の側面だが、牧畜社会の例から分かるように、旱魃のように事態が徐々に進行する場合、さまざまな措置をとる時間的余裕がある。旱魃に限らず、ほとんどの凶作や不漁は、何らかの予兆をともなう。こうした予兆をできるだけ早くとらえ、効果的に行動をとることは、伝統的傾向が強い社会では不可欠な知恵である。モダニティ傾向が強い社会でも、こうしたローカルな経験知を蓄積し共有することは、防災の基本として重要である。

このことは、いくら強調してもしすぎることはない。長い人類史において、社会生活の持続は、災害要因の排除のみによって成し遂げられたわけではなかった。むしろ、生態系のリズムが定期的に（ときに慢性的に）起こす食糧不足（生態的ストレス）を緩和し、破局を避けることが重要だった。今日のモダニティ状況においても、農業や漁業といった分野では、自然の不確定要因が生産に大きく影響する。工業のように生産を完全に計画化するのではなく、災害要因と「うまくつき合う」妥協策を求めなければならない。しかしその分、経験知の蓄積と共有は必要で

ある。こうした防災の方向性は、他の分野においても、もっと模索されてよいように思われる。

社会の防災力を高めるうえでもう一つ留意すべきことは、社会的弱者への配慮である。社会の人口規模が拡大し、その機構が複雑になると、災害に抗う能力に地域差や階層差が現れるという指摘がある。国によっても差が生じる。つまり、先進国と発展途上国とでは、同じ規模の地震や台風に襲われたとしても、被害の受け方が異なるというのである。言うまでもなく、先進国では死傷者も少なく立ち直りが早いのが、発展途上国では死傷者が多数にのぼり復興に時間がかかる。こうした格差は、社会の不平等な仕組みに由来する。このような「人為的な災害要因」を取り除き、社会的弱者の能力を底上げすることが、防災力向上のためのもう一つの目標である。

次に、災害からの回復の側面。マスメディアなどが話題にする「復興」の大部分は、本章で述べてきた四つの災害局面でいうと、公共サービスの復元を意味するように思われる。この意味での回復は、物理的な補修で実現できるため、じつはもっとも容易である。コミュニティ機能やローカルな経験知の回復は、災害で亡くなった人たちの役割や経験を埋め合わせる必要があるため、物理的な復興よりはるかに難しい。日常的ルーチンも、上記すべてが回復しなければ、ほんとうの意味において回復しない。

この問題は、じつは文化というものの本質に大きく関わる。唐突なようだが、台風や山火事に見舞われたスギ林を考えてみよう。災害によって一定範囲の木が倒れると、林に空白部分（ギャップ）が生じるが、そこには周囲から飛んできた種子が落ちて芽ばえ、新たなスギ個体が育つ。そして年月が経つと、もとのようにスギに覆われる。生態学の分野では、こうした生態系回復の潜在力を回復力（レジリエンス）と呼ぶ。厳密に

言うところ、災害前と同じスギ個体ははえていたわけではない。しかし、外部から供給される種子には、もとのスギと類似した遺伝子が備わっているので、傷跡がもとのように癒されるのだ。そこには、同じ遺伝子が同じ形態と機能を再現するという、生物学的な機能回復のメカニズムが働いている。

しかし、人間集団のレジリエンスは、事情を異にする。人間集団では、個人の経験やアイデアを文化的に共有できるが、その範囲が地理的に狭く限定される場合がある。とくに、集落内での役割やローカルな経験知は、その傾向が強い。このため、大規模災害によって集落全体が大きな打撃を受けた場合、帰還した生存者が多くとも、重要な役割を担う人や物知りが帰還しなかった場合には、集落のコミュニティ機能やローカル経験知が回復しないことがある。

ヒトは、環境に働きかける方法を文化的に他個体に伝えられるため、遺伝子経由でそれを伝える他の生物種にない能力をもつ。しかしそのことは、災害時において、破局を導きかねない意外な脆さとなって現れるのである。

さまざまな手段を講じて、コミュニティ機能とローカル経験知を保存しておくことが重要だろう。スギ林のように、集落外でそれらを継承することも考えてよい。しかし、集落のすべての役割や経験知を外部に託すという目標は、現実的とは言えない。集落内外のさまざまな力を結集し、効果的に結びつけながら、失われたものを新たなもので補うことも考えなければなるまい。いずれにせよ、失われたものの本質を見通せるのは、集落に暮らす当事者以外にない。その見通しを外部まで伝えて、外部からの支援を導くようなシステムが、今後の災害行政には求められることになろう。